

「引受け手のない企業の再生は面白い」 Jトラスト 藤澤信義のノンバンク再生哲学



傷んだ企業を次々と買収。負の遺産があるがゆえに、安く買えるメリットがある一方で、様々な障害が必ずついて回る。その障害をいかに乗り越えていくかが、いわばこの再生ビジネスの真髄だ――。

本誌・畑山 崇浩 Text by Hatayama Takahiro

大証2部上場の Jトラスト社長に就任

「たまたま巡り合わせで、特に消費者ローン・事業者ローン事業で、ほぼ全ての業者が傾いた状況があつて、そのときビジネスチャンスだと感じた瞬間がありました。そこに積極的に投資をしてきたのです」

こう語るのは、大阪証券取引所2部に上場するノンバンク、Jトラストの社長に今年6月に就任した、同社の個人筆頭大株主でもある藤澤信義氏。その存

在がいま、金融界でにわかにな注目されている。

Jトラストは旧社名イッコロプロロ」と言うほど細々と、事業者ローンを行っていた会社。2008年3月に藤澤氏が筆頭株主となり、「当時、資産の入れ替えをやり、何とか黒字を確保してきた」(藤澤氏)中で、今度は業界全体に淘汰の波が押し寄せた。今や同社は、その御大のロプロまでも子会社に収め、今年は楽天からクレジットカードの「KCカード」を買収したこ

とで、さらに事業拡大の途上。

消費者ローン・事業者ローン業界は、貸金業法改正とそれに続く最高裁判決によって、過去の利用者からの過払い金返還請求が増大。上場大手は過大な引当に耐えられなくなり撤退や経営破綻も相次ぎ、メガバンクへの傘下入りなどで再編がほぼ一段落した状況。こうした再編の一方の底辺を、藤澤氏のような「火中の栗」を拾いにいく経営者の存在が下支えしている。

藤澤氏はこのJトラスト以外にも様々なノンバンク企業に投

資をして現在、ネオラインキャピタル・グループという一大グループを形成する。ネオラインが傘下に持つ企業は、旧三和ファイナンス、プロミスの子会社、アイフルの子会社、NISグループなど枚挙にいとまがない。

藤澤氏には、そうした火中の栗を拾う「投資ファンド」の側面が、これまでも注目された時期が何度かある。例えば現在、中国企業の傘下に入っているレナウンの筆頭大株主にも就いていた。

藤澤氏はノンバンクを数多く傘下に収めた経緯を「当時ほとんどほかに引受け手がいないので非常にいい条件、ある意味言い値で買うことができた」と話す。

経営危機に陥った企業から一つ一つ、負の遺産を取り除いていく作業はたいへんだろうが、それをやり抜くためにはとにかく、コソコソとやっていくしかない。藤澤氏の企業買収・再生のいわば真骨頂とも言うべき部分だ。

「そこで働いている従業員がやはりいて、雇用はできる限り守るべきだと思うのです。それをちゃんとやりたかった。破綻させれば済むではないかという話もあるが、それはたぶん、過払い金(返還を狙う)弁護士の方々も望んでいない。破綻させるのは簡単なのです」

ライブドア事件では つらい思いを経験

Jトラストは今年4月、経営破綻した武富士のスポンサーに

名乗りを上げた後に撤退。撤退理由は同社プレスリリースに詳しいが、藤澤氏の注目度を増すことになった。実はこの武富士の一件は、Jトラストの6月末の社長交代にも関係してくる。

「今年、一連の武富士、楽天KCの件があり、また前社長の千葉がKCと韓国の消費者ローン会社の社長に就き、韓国や福岡に行くことが多くなり多忙になった。実質、私が筆頭株主で取締役でしたから、では私が社長、前社長は代表取締役副社長でいこうということになった。会長・社長でもよかったのですが、そういう形にしました」

藤澤氏が上場会社のJトラスト社長に就いた意味は大きい。「今までは未上場会社である程度規模の大きかった会社もあります。影で支配しているというわけではないのですが、余り表には出ないで、みんなに活躍のチャンスを提供していました」

「今年の振興銀行(NISの買収関連)の件では結構、レピュテーションを含めてつらい思い

をしました。いろいろな憶測で言われ、だったら正々堂々と、ちゃんとした会社なんですということとをアピールするべく表に立つた、ということもあります」

藤澤氏はレピュテーションでつらい思いを以前も経験した。旧ビイ・ジャパン時代。会社ごとライブドアに買ってもらい、社名がライブドア不動産となつて3、4カ月目。例のライブドア事件が勃発。事件はそれより1年以上前の取引が対象だから、同社と関係がないのに、ライブドアと社名に付いただけで、社員は住宅ローンの融資さえ受けられなくなった。「私自身、検察の事情聴取さえ受けていないのに、この仕打ちです。何とかしなくてはいけないという気持ちがありました」。

藤澤氏は1970年生まれ。東京大学医学部時代、ゲームセンターでのアルバイトが高じ、そのままアミューズメント業界に就職。同業界での仕事の総仕上げとして現在、出資先企業のマザーズ上場ネクストジャパン

ホールディングスの会長、その子会社で同社より規模が大きいジャスタック上場アドアーズ会長も務める。今も土日は「現場回りしているほうが好き」というほどアミューズメント業界人を自認する。

端からは、かなりリスクをとりに行く人のように映る藤澤氏。自身も含め「人間は失敗する。でも失敗しても致命的な大きさにならないように心がけています。『最悪、これでもいい』というところから意思決定しています」と話す。その考えの根底には、「無理をしない。ぼちぼち」として最後は「何とかなる」という思いがある。

「私自身は金融の実務経験はないんです。当然、仕事ですから一生懸命やっていますが、実務は社員の皆さんがやることだと思っています」。

ほかに買い手がつかない企業を安く買うからには、様々な障害もつきまとうはず。その障害をいかに乗り越えられるかに再生のポイントがありそうだ。